

発行：弘大病院広報委員会
(委員長：水沼英樹病院長補佐)

弘前大学医学部附属病院広報誌

なんとう

南塘だより

第36号

(創刊：1994年12月15日)

〒036-8563 弘前市本町53
TEL：0172-33-5111 (代表) FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言「特定機能病院と包括医療」

弘前大学医学部
附属病院長 棟方 昭博



近年、次第に増大している国民医療費を抑制する必要から、医療費が従来の高額払い制度の方向が転換されつつあります。本院でも昨年の6月より包括制度が導入されました。また本年4月に仙台で開かれた日本消化器病学会総会で、特別企画「消化器病と包括医療」の司会兼パネリストを経験したので、その印象について述べます。包括医療導入による益点としては、

1. 費用効果やエビデンスを重視した客観的医療への転換、2. 無駄を省く努力を促すことによる患者の負担軽減、3. クリニカルパスなどの入院期間短縮、4. 併発疾患をもたない単独疾患では病院経営上よい、などが挙げられます。一方、損点としては1. 診療体系に沿わない場合や高度医療には適さない、2. 高額な新薬や治療法では採算が合わない、3. 医療機関別係数の将来への不安、4. 高度先進医療の開発を阻害しないか、などが挙げられますが、行政が一度導入した包括医療の流れは今後も続くと思います。消化器疾患を中心とした包括医療の今後の課題としては1. 内科系医療技術の定量化—インフォームドコンセントの評価など、2. 最大入院期間と合併症との関係の検討、3. 癌化学療法での高額薬剤の包括外化、4. 劇症肝炎での高額薬剤の包括外化、5. 重症肺炎に対する抗生物質・抗毒素薬の局所動注療

法などが考えられ、その対策の一部として外来化学療法室を設置し、外来での化学療法を進めており、さらには治療前に外来でできるかぎりの検査等を行うことが求められています。

包括医療は費用効果やエビデンスを重視した客観的医療への大きな転換点となりましたが、導入に伴い難治性、有合併症など、高度医療を実施している特定機能病院への導入には問題点が少なくないことが明らかとなりつつあります。また、一日定額制で包括される診療行為は、実施してもしなくても診療費は同じであり、病院経営の面から考えると、なるべくコストを少なくする方向へと進むと思います。このことは、場合によっては医療の本質を損ない、医療の低下につながる危険性が危惧されます。以上の事項に気を配りながら、良質の効率的な医療を提供し、かつ安定した病院経営をしたいと思えます。

先憂後楽

春を待ち望んで



病院長補佐 (第一外科)
福田 幾夫

先日、約9ヶ月ぶりに空に白いものが舞いました。最近の温暖化で、もしかしたら今年の冬は降らないかもしれない、甘い期待をしていましたが、やはり冬は来るようです。青森のすばらしいところは、四季折々の自然の姿だと思います。私はもっぱら自転車通勤ですが、雪を抱く岩木山に緑が駆け上がり、やがてお城の桜がぱっと散って、爽やかな若葉になる。この四季の変化を楽しみながらの通勤は最高です。しかし、山々が錦に染まった後、駆け足でやってくる雪の降る冬だけは、青森で育った人でもいやだとか。とはいえ、人々は雪囲いをし、タイヤを換え着々と準備をすすめています。それにしても、冬の間重い雪に耐え、春の訪れに備えて着々と地面の下で準備をすすめる植物たちには、本当に驚かされます。日差しが和らぎ、春の気配がすると、すくっと雪の中から芽を出してくる姿を見ると、ただ眠っていた訳ではないようです。十分な準備がなければできません。

さて、大学病院も今は冬真っ只中というべきでしょうか。卒後臨床研修の対応、中期目標の達成、医療事故の届出義務化など対応しなければならぬことは山積みです。一方で人は少ない、資金はない、給料は下がったと困難ばかりが目立ちます。こんなことで大学病院は生き残ってゆけるのだろうか、疑問を持たないわけではありませんが、文部科学省を非難したところで、現状が変わるわけでもありません。幸いにして、われわれにはこの地域の医療を支えてきたという実績と、大学として培ってきた知恵というものがあります。問題点を抽出し、一つずつ解決し、制約条件の中で最大の効果が得られるように努力を続けてゆくことが現在最も重要なことだと思います。世界最大の売り上げを誇るトヨタも、その基礎は華やかなことではなく、現場では鉛筆一本も最後まで使う、工場では組み立て時間を1秒でも短くする努力を積み重ね、無駄を省くことによって、初めて顧客本位のサービスと製品を提供していると聞いています。皆で知恵を絞って、業務を効率化し、医療サービスを改善する努力を積み重ねることが、やがてめぐってくる春に大きな花を咲かせる大きな原動力になると思っています。

診療科の紹介【放射線科】

放射線科の病院内での担当は、放射線診断(C T, MR, 核医学, 血管内治療を含む血管造影検査)と放射線治療です。平成15年度は診断関係でC T, MR, 核医学と血管造影が、それぞれ9,691, 4,430, 1,339ならびに787人に対し行われ、担当した検査の全例について読影レポートが付され、血管造影検査のうち血管内治療が288例に行われています。また放射線治療(外照射)は345人の新患を対象に行われ、さらに各種の密封小線源治療を行っています。この他に放射性ヨード内用療法による甲状腺疾患に対する治療を87件行いました。診断と治療の件数は右肩上がりに増加しており、病院インフラの一翼を担っていると自負しています。

外来では血管内治療を含む血管造影検査と放射線治療の新患受付と再診を主として行っております。適切な診断法が不明な場合は、画像診断の相談も

受け付けていますので遠慮なく相談していただければと考えています。治療部門でも放射線治療の適応について相談に応じています。院外の先生方も遠慮なく御連絡戴ければと思います。外来は診断部門では毎日受付しております。治療部門は月曜日から水曜日の受付となっておりますが、転移性脳腫瘍、転移性脊椎腫瘍による神経麻痺などの緊急治療が必要になる時には木、金でも受付しております。

入院は1-2病棟とRI病棟です。1-2病棟は放射線治療と血管内治療の患者様がほとんどです。RI病棟は放射性ヨード内用療法と密封小線源治療の患者様が入院します。

診断部門では研修医のためのCPCに積極的に関与するとともに各科とのカンファランスを継続して開催し、各科との意思疎通を図り診断精度の向上を目指しております。治療部門でもカンファランスと共に、体幹部定位照射



ならびにIMRT(強度変調放射線治療)の準備を進めており、更に精度の高い治療法を近日中に開始する予定です。また泌尿器科と合同で前立腺癌を対象とした密封小線源治療を開始すべく計画を立てているところです。

放射線科医の不足は当院および本県でも深刻であります。一騎当千の精鋭医師団の奮闘と応援医師の協力を得ながら、質の高い診療を提供していきたいと思えます。(放射線科)

新任科長の自己紹介



麻酔科長
廣田 和美

平成16年9月1日付で弘前大学医学部附属病院麻酔科長および集中治療部長を担当させていただくことになりました。私は昭和61年に弘前大学医学部を卒業後、当院麻酔科に入り、以後青森県立中央病院、室蘭市立病院、函館渡辺病院、苫小牧市立病院、青森労災病院麻酔科で勤務し、平成4年からは大学病院にずっとお世話になっております。

麻酔科は、手術の麻酔、集中治療管理、緩和医療などが診療の中心となるため、他科からの依頼患者が多く、中央診療部門としての役割が強いことが特徴です。ですから、各科医師の要望を聞きながら、協調して仕事をしていく必要があります。このため自分のペ

ースで仕事が出来ないことが最大の難点であり、麻酔科指導医の資格を取った頃は、各科の医師の勝手な行動(その当時はそう感じていました)に腹を立て、我々がこんなに頑張っているのに、なぜ彼らの態度はいいかげんなのかという不満から、攻撃的な性格に変わっていききました。しかし、しばらくそのような状態が続くうちに、諦めの気持ちが入り始め、攻撃的発言を控えるようになりました。そのことが少し物事を冷静に見られるきっかけとなったようです。以前は各科の医師のエゴと想っていたことでも、その背景を冷静に見てみると、大きな組織ゆえにこちらの意図が各科の隅々までには十分に伝わっていなかった結果であったり、スケジュール調整上やむを得ない事情であったり、実は患者のわがままに他科の医師も振り回されて、その余波が我々の方に来ていることなどがわかりました。

私にとっては全体を冷静に見つめることで、色々な問題にも視野を広げで考えることが出来るようになった気が

します。当科の血気盛んな中堅医師が他科の対応に不満を口にしている姿を見ると、昔の自分を見ているようで苦笑してしまいます。

大学病院の独立法人化に伴い、病院経営の上で中央診療部門を司る我々の果たす役割が、益々大きくなってきていることを実感しております。私としては経営を考えた上で、各科の要望に謙虚に耳を傾け、当院の使命にもある「患者の心身に健康と希望をもたらすことにより地域社会に貢献すること」を病院全体としてできるよう各科と協調してチーム医療を行っていきたくて考えております。現在、全国的に麻酔科医師不足であり、当院もその例外ではありません。このため各科の先生方の御要望に十分にお応え出来ていないのが現状であります。今後なんとか人員を確保し、より質の高い診療を目指して努力していく所存ですので、どうか御指導、御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

第5回弘前大学医学部附属病院卒後臨床研修教育ワークショップ報告

卒後臨床研修センター長 加藤 博之
 今回で5回目を迎える弘前大学医学部附属病院卒後臨床研修教育ワークショップが、平成16年10月22日(金)ー24日(日)に、青森市のみちのく銀行研修会館で開催された。本ワークショップは、卒後臨床研修において研修医を指導する指導医を養成するための講習会であり、平成14年8月に第1回が開催されている。今回ディレクターは、棟方昭博病院長と筆者が務め、チーフタスクフォースには前回に引き続き畑尾正彦教授(日本赤十字武蔵野短期大学)をお迎えした。他にタスクフォースとして、本学の坂井哲博助教授(手術部)、大沢弘講師(総合診療部、卒後臨床研修センター)と筆者が務めた。受講者は19名(本学教員8名、県内臨床研修指定病院医師11名)であった。内容・形式は基本的には過去の講習会を踏襲し、なごやかな雰囲気の中にも真摯に課題に取り組んで無事講習会を終了することができた。一方、本ワークショップの制度上の位置づけとして今までと大きく異なる点があり、それは今春から講習会を事前に厚生労働省に届け出る制度が導入され、今回のワークショップを厚生労働省認定の講習会として開催したことである。本年3月に厚生労働省医政局長から「医師の臨床研修に係る指導医講習会の開催指針について」という通達が出され、主催者の資格、開催期間(2泊3

日以上、講習時間16時間以上)、形式(参加者主体の体験型研修、参加者数50名以内、小グループによる討議など)、テーマ(プライマリ・ケア、医療安全管理などいくつかの決められたテーマを含むこと)などについて細かに規定されるようになった。そして事前に開催内容や参加予定者氏名を厚生労働省医政局長あてに申請し、認可された講習会だけが、医政局長名の入った修了証書を授与することができるように改められた。近い将来、全国的に日本医療機能評価機構による研修病院の評価が導入される可能性が極めて高く、厚生労働省認定の指導医講習会を受講した指導医の有無・数は重要な評価項目の一つであることから、本ワークショップは今後ますます重要な行事になってゆくと思われる。



ワークショップにおけるディスカッションの風景。夜遅くまで熱心に討議した。

第6回「家庭でできる看護ケア教室」～日常生活における看護の実際～

看護部(2病棟5階) 佐藤 葉子
 看護部主催による第6回「家庭でできる看護ケア教室」は、平成16年10月25日からスタートし、3日間に分けて開催されました。1日目は「移動の方法：日常の介護に必要な身体の動かし方」、2日目は「介護に役立つ食事と栄養：食事の工夫と食べさせ方」、3日目前半は「からだの清潔と床ずれの予防」、後半は今年新たに取り入れた「老人が安心して生活するために：清潔で安全な環境づくり」をテーマとしました。今回は昨年に比べ参加人数が少なかったのですが、ケア教室の雰囲気がアットホームな感じで、参加者一人一人が各々の家庭で抱えている疑問や悩みを投げかけてくるといった場面が多くありました。私達は3日目の「からだの清潔と床ずれの予防」を担当しました。自宅にあるもので作れるケリボード作りの時間には、自分が納得できるまで何度も作り直すといった姿が見られ、受講者の意欲が伝わってきました。受講者の中には当院でボランティアとして活動している方や昨年受講し今年2度目という方もおり、家庭でできるケアへのより専門的な情報を求められているように感じました。私達ナースは退院後自宅での介護に当たるご家族に対しても、自宅でのケアが安全にまた手軽にできる方法を日頃から心がけていくことの重要性を再認識させられ、その実践に繋がっていきたいと思いました。



ワークショップにおけるディスカッションの風景。夜遅くまで熱心に討議した。



病院広報委員会委員長推薦の一服の絵(2) 「孔雀草」

中央診療棟1階、放射線部受付脇の壁面に飾られているこの絵は、前号の「花と少女」と同じく弘前大学卒業生の生平さんが書かれたものです。孔雀草の花言葉「可憐-Loveliness-」のとおり、白と紫の可憐な花が私たちの目を楽しませてくれます。

生平 絵美
 (平成12年度弘前大学教育学部卒業生)

立体駐車場10月完成



附属病院では、同病院正門脇(保健学科校舎側)建設の立体駐車場がこの程完成し、11月1日から利用を開始した。立体駐車場は、財団法人弘仁会か

ら寄贈を受けたもので、同8日に感謝状贈呈式が附属病院長室にて行われた。駐車場は、地下1階、地上2階建てで、屋上を含め223台が収容でき、1階には車椅子利用者向けに、5台分の駐車スペースを確保、24時間の利用が可能である。また、従来の駐車場の一部も引き続き使用するため、収容台数がこれまでの約3倍となり、長年念願であった駐車場不足が解消された。

駐車場の料金は、駐車場の維持管理費として使われるもので、外来患者の場合は診察と会計を済ませ受付で駐車利用券のチェックを受けると無料となり、チェックから30分過ぎると有料となる。(管理課)

院内コンサート開催 10月/医学部管弦楽団&医学部創立50周年記念アンサンブル 11月/東奥義塾グリーンクラブ

患者サービスの一環として実施している恒例の院内コンサートが10月と11月の2回、いずれも午後6時45分から附属病院外来待合ホールで開催されました。10月1日(金)は、院内コンサートの常連「医学部管弦楽団&医学部創立50周年記念アンサンブル」を迎えて、シューベルト『軍隊行進曲』、バッハ『ブランデンブルク協奏曲第5番』などの名曲を鑑賞。チェンバロの華麗な調べも交えて、会場全体に響き渡る本物の「音」を心行くまで楽しんだひとときでした。また、11月12日(金)には、院内コンサートは8年ぶり2回目の登場となる「東奥義塾グリーンクラブ」を迎えての混声合唱。プログラムは『少年時代』『みんなで歌いましょう』『もみじ』『世界にひとつだけの花』などポピュラーな10曲。6人の高校生の澁刺とした歌声が会場の隅々まで染み通り、また、懐かしい『もみじ』では、メンバーが患者さんの席に1人ずつ入ってみんなで輪唱するなど、和やかで元気の輪が大きく広がりました。コンサートは、医学部管弦楽団45分、



グリーンクラブは30分と文字どおりのミニコンサートでしたが、会場の大勢の患者さんたちには好評で、満足の様子でした。メンバーの方々には多忙な中、ボランティアとして貴重な時間を割いていただき感謝に堪えません。心からお礼申し上げます。(医事課)

外来化学療法室の開設

外来化学療法室(第一内科) 玉井佳子

従来入院を必要とした多くの化学療法(抗腫瘍薬など)を用いた治療の一部が通院で施行可能になった結果、患者様の利便性の改善、治療費用の軽減、生活の質の向上などのメリットが得られるようになりました。しかし、当院における一般外来での点滴治療環境は決して整備されていたとはいえません。数時間にわたる化学療法を安全かつ快適に受けていただくため、平成16年10月に当院に外来化学療法室が開設されました。同室には専任の薬剤師・看護師が配置され、担当主治医とともに「患者様に、より安全に、安心して、快適に治療を受けていただく」ことを目標に①安全キャビネット内での点滴薬剤の無菌調剤、②リラックスして治療を受けていただくためにベッド、電動フルクライニングチェア、個人用のテレビを設置し環境整備に努める、③患者様の疾患ならびに治療

や疾患に関する心配・不安に関しての相談を受けたり、治療・副作用に対する理解を深めていただくためにパンフレットを用いた説明を行う、などの活動をしています。利用に当たっては事前の予約が必要で、「外来化学療法加算と無菌製剤加算」を負担していただきます。開設1ヶ月間での利用は42件(全外来化学療法20%)でしたが、毎週利用率は増加し現在40%を超える状況となっています。患者様の評判も上々です。事前の見学希望に対しても応対しておりますので是非ご利用下さい。(なお外来化学療法室の設備の多くは青森銀行様、あおぎんリース様から寄贈していただきました。)



附属病院消防訓練について

病院施設の防火上の安全管理を図る上で、法令に基づいた「自衛消防訓練」及び「防火管理」と云った普段からの火災に対する備えが重要であることは言うまでもありません。例年どおり、自衛消防訓練の必要性と施設面での防火管理を踏まえ、10月28日(金)午後2時から約1時間、第1病棟7階及び南塘グラウンドを中心に「附属病院総合消防訓練」が実施されました。火災は、第1病棟7階奥の乾燥室から午前3時に発生したものと想定し、自衛消防隊長(病院長)他、病院関係者、弘前消防署員らが見守る中、看護師による防災センターへの通報訓練及び医師、他フロアからの応援看護師による模擬患者の避難誘導訓練、屋内消火栓を使用する放水訓練が消防計画に従い、着実に実施されました。また、弘前消防署の梯子車による病棟7階バルコニーから、高所の模擬患者救出訓練もありましたが、多少不安を覗かせて参加者達も支障なく、避難することが出来ました。



病棟での避難訓練終了後、場所を南塘グラウンドに移し、弘前消防署員より消火器の取扱説明を受けた後、実際に消火器を使用する消火訓練が実施されました。ガソリン入りの容器から激しい炎が立ち上がる中、約30名の職員が消火器を手に一人ずつ目標物に消化剤を噴射し、消火訓練が行われました。全ての訓練終了後、自衛消防隊長、弘前消防署員による講評を受けましたが、特に大きな指摘事項もなく、訓練を無事終了することが出来ました。なお、消防訓練に際し、御協力を頂いた関係各位には、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。 (施設環境部環境安全課)

【編集後記】

南塘だより第36号をお届けいたします。お忙しい中、ご投稿いただきました皆様に御礼申し上げます。いよいよ冬将軍の到来です。夏暑く、冬寒い1年になるのでしょうか。灯油の値上げ、寒冷手当の削減など、懐も寒くなりそう…。独立法人化で病院がどうなるのか、不安だった方も多いと思いますがなんとか無事？年越しできそうですね。今年はイラクの戦争、新潟の地震など、多くの方

が亡くなり、あるいは傷ついた年でありました。暗いニュースばかりが浮かんで来て、アテネ・オリンピックで沸いた記憶など遠い昔のような気がします。皆様にとってはどんな年でしたでしょうか。目標は達成できましたでしょうか。今後は病院にとってますます厳しい状況が続くことが予想されます。しかし、我々には冬将軍を毎年打ち破ってきた底力があります。皆で力を合わせてよりよい医療を目指し、地域医療のために尽くしていこうではありませんか。(病院広報委員 石井賢治)